

はじめに

落語や講談などの伝統話芸にハマったのは高校生の時だ。今と違いオタクに市民権などなく、クラスで浮きまくっていた私に「落語が好き」などと言う勇氣はなかった。友人にも親にも妹にも内緒の趣味であった（妹にはバレていたらしい）。

駅前の古書店で買った1本500円のカセットテープを、夜中に隠れてこそ聴いていた。孤独と劣等感に押しつぶされていた私の10代は、「死神しにがみ」と「小言幸兵衛こごんこうべえ」と「中島みゆきのオールナイトニッポン」とともに再生される。

幼い頃からテレビなどの動画が苦手だった私にとって、音だけで楽しめる落語は実に心地よい娯楽だった。

だがしかし、困ったことに私は活字中毒でもある。気に入ったラジオドラマや映画は必ず

原作やノベライズを買って読んでいたほどだ。ところが落語と講談に文字情報はない。

「演芸速記」を知ったのは、湧き上がる活字欲求に耐え切れず、いよいよ自分でカセットの音源を文字起こししようかと思いついた矢先だった。

見つけたのは、例によって駅前の古書店である。「名人落語集」みたいなタイトルで、雑誌のオマケのような体裁だ。本を手に取り凝視していると、店主が初めて声をかけてきた。

「そのシリーズ、こっちにもあるよ」

たまに来る薄暗い女子高生が、日焼けした落語本を手にとって固まっている。よほど異様だったと思う。1冊100円だったので、4冊全部買い求めた。

駅で読もうかと思ったが、同じ高校の生徒に会いそうなのでやめた。家に帰って読もうにも、母親に見つかったら捨てられてしまう（彼女に古書の理解はなかった）。考慮の結果、私は家から離れたバス停の掘っ立て小屋に入り、本を開いた。

三遊亭圓朝さんゆうてい えんちょうの「怪談乳房榎かいだんちちぶさえのき」。知らない落語である。文字と言葉を追う。言葉が脳内で会話となり、高座になる。

読める。読める。読める。ほろほろと涙が出てきた。

「これは文学だ」

文学が何たるか、わかっていないのは百も承知だ。しかし私は、落語を読んで確かに感情

を動かされ落涙した。

だから私は、文字となった「怪談牡丹燈籠」を読んだ明治の人々の衝撃を思う。高座を見たことも聴いたこともない人々が読む演芸速記は、果たして「草紙」か、それとも新たな「小説」だったのか。

インターネット全盛期となり、全国どこでも演芸を動画で見ることができるようになってもお、レコードの録音に合わなかった三遊亭圓朝の落語を知るには、これまでもこの先も先人が写し取った演芸速記しかないだろう。

本書では、そんな演芸速記と近代文学の境界と交差を、ロマンとノスタルジアへの偏向を自覚しつつ考察する。

私は多分、たとえ動画や音声で圓朝の高座が残されていたとしても、速記本を求めるだろう。

写された言葉の集合からしか得られない熱量が、明治、大正、昭和の演芸速記にはあるのだ。

目次

はじめに 2

1 章 演芸速記と言文一致の誕生 11

速記第一号！怪談牡丹燈籠

演芸速記とは何か 12

読む「怪談牡丹燈籠」の誕生 14

言文一致体に可能性をみる文壇 18

三遊亭圓朝が明治にもたらしたもの

圓朝とは何者か 22

師匠・圓生との確執から生まれた新作 25

速記の可能性を読んだ牡丹燈籠 28

小説とは何か 文壇の試行錯誤

戯作の時代 31

人情を写実してこそ「小説」 33

戯作の呪いが解けない逍遙自身の苦悩 36

二葉亭四迷の予想外な成功

言文一致とはじめ 39

江戸っ子四迷のべらんめえ調 43
小説など書きたくなかった四迷 46

夏目漱石と大衆の笑い

江戸っ子夏目漱石 49
「猫」と落語ネタ 51
滑稽の中に見える粋な笑い 57

2 章 高座を「読む」人情噺 59

やまと新聞と演芸速記

エンタメ否定に戯作者廃業 60
熊さん八つつあんが読む新聞 63
塩原多助の速記本刊行 66
速記連載で部数を拡大するやまと新聞 68

消えた江戸の幽霊、累とお岩

政府の幽霊嫌いと圓朝の逆襲 72
幽霊を以て人情を書く 76

江戸怪談の真骨頂「四谷怪談」 80

速記雑誌の誕生

速記雑誌の金字塔『百花園』 85
速記は花形職業 今村次郎 87
演芸速記の楽屋裏 89
百花園の編集室 90

新聞社同士の攻防戦

新聞小説というジャンル 94
大新聞存続の危機に効く小説 96
泉鏡花と鍋木清方 98
夏目漱石争奪戦 101

3 章 「伝える」ための試行錯誤 105

江戸後期から幕末までの口語体

江戸後期の落語 106
滑稽本と人情本の口語体 111

江戸っ子と文芸

江戸の方言で書かれた本 117
登場人物たちの苦悩は誰が語る？
「怪談牡丹燈籠」の神の視点 123 119

高座の再現と独自性の表現

そのまま写すか修正するか 128
今村次郎のこだわり 129
「落語を文学に！」アンツルの主張 132

速記と芸人

活字落語はダメだよ 138
文楽の完璧主義 141
圓喬の「蒟蒻問答」 143

4章 小説と話芸速記の境界線

147

演芸から小説、小説から演芸

口語で読む演芸 148

小説家・談洲楼燕枝 152

伝説の『百物語』を読む

お化けよりも怖い怪談親玉株 160
小泉八雲もうなる伯圓の怪異 161

書き講談・立川文庫から大衆文学へ

高座の代わりの「書き」口演速記 166
書き講談と新講談で歴史を学ぶ少年たち 168
講談社の新講談 172
人々が求める創造という娯楽 175

探偵小説誕生前夜

謎解きとミステリー 179
小説家だと思っていなかった黒岩涙香
ノンフィクション探偵小説『無惨』 186 182

涙香以降の名探偵たち

お化けが書けない 188
半七が語るミステリー 190

怪奇と探偵 191
講談師・神田伯龍と明智小五郎
小説から講談・落語へ 197

5章 演芸速記を読んでみると

絶滅危惧種の速記本 200

明治の演芸速記・圓朝全集

201

明治の演芸速記・談洲楼燕枝

202

明治の演芸速記・百花園と後出の速記雑誌

203

204

昭和の名人たち

落語は文学か

「芝浜」のホントのところ

207

高座で見せるのは言葉か芸か

209

おわりに

214

参考文献

219

引用文については、読みやすさを考慮し、旧字体やかなづかいを改め、ルビを追加し、句読点を補うなど適宜修正を行った。



1章

演芸速記と
言文一致の
誕生